

Waseda Daigaku, Tokyo R. KOGAKU Kenkyu
Hokoku Sci/Eng

早稲田大学

理工学研究所報告

第129輯

BULLETIN
OF
SCIENCE AND ENGINEERING
RESEARCH LABORATORY

WASEDA UNIVERSITY

No. 129

エジプト・マルカタ王宮「Room H」天井画 における聖刻文字例の復原研究

西本 真一*

Restoration of the Hieroglyphic Inscriptions on the Ceiling of Room H at Malkata Palace

Shin-ichi NISHIMOTO

(Received 18 April 1990)

The palace-city of Malkata was built by Amenhotep III on the west bank opposite the ancient southern capital of Thebes in Egypt. It was excavated and surveyed by the several investigators from 1888 onward, but the Egypt Architectural Mission of Waseda University resumed explorations there from 1985 to 1988 in order to study on the wide variety of decorative motifs.

From "Room H" located in the center of the Palace of the King, a large number of painted mud fragments were recovered. Some of them bear the parts of the hieroglyphic inscriptions, including the cartouches of nomen and prenomen which are under the wings of each vultures goddess Nekhbet.

In the following discussion the monumental hieroglyphic inscriptions painted on the ceiling of the nave at "Room H" is reconstructed by using the actual painted fragments.

Key Words: Ancient Egypt, Malkata, Palace, Hieroglyph, Painted Ceiling, Inscriptions, Nomen, Prenomen

1. まえがき

古代エジプト新王国時代において最も権勢を誇った王はアメンヘテブ三世 (ca. 1417-1379 B.C.¹⁾) であり、この王によって建立された日乾燥瓦造の王宮址が現在でもルクソール (古代名「テーベ」) 西岸の「マルカタ」と呼ばれる地域に残っている (Figs. 1 and 2)。

おおよそ 3 km 四方にわたる礫砂漠には、「王の宮殿」(Fig. 1, A) をはじめとして、アメン神に捧げられた神殿 (Fig. 1, I) や王族たちのものと言われる住宅址 (Fig. 1, E) など種々の施設が点在するほか、港灣施設あるいは祭祀施設として用いられたという巨大な人造湖の跡も王宮に隣接

このように王宮都市と呼びうるまでに大規模で、しかも短い期間の間にほとんどすべての建築施設が建造された王宮の遺構としては、次代の王アケナテン (ca. 1379-1362 B.C.²⁾) の建立によるアマルナ王宮を除くと類例を見ることはできない。

マルカタ王宮に関しては前世紀の末から数度の発掘調査が行われてきており、刊行された正式な報告書の数は限定される^{2)~6)}もの、当王宮から出土した土器片に基づく研究などについては欧米の研究者たちによって考察が重ねられている^{2), 5), 6)}。特に、出土遺物に記された文字と敷地におけるそれらの分布状態から王宮各施設の用途と建立年代を探ろうとしたヘイスの論考⁷⁾によって、少なくとも建築施設ごとのおおまかな性格や

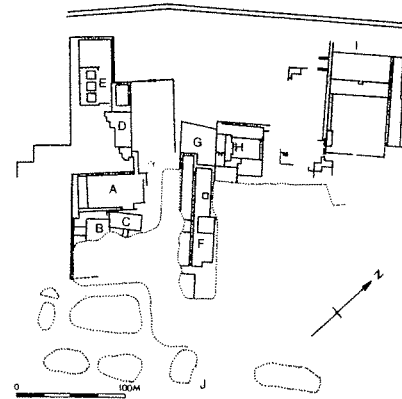


Fig. 1 General plan of Malkata Palace

A: Palace of the King, B: South Palace, C: Kitchens, D: Middle Palace, E: West Villas, F: North Palace, G: Village Area, H: Audience Pavilion, I: Temple of Amun, J: Mounds of spoil sand of the Lake "Birket Habu"

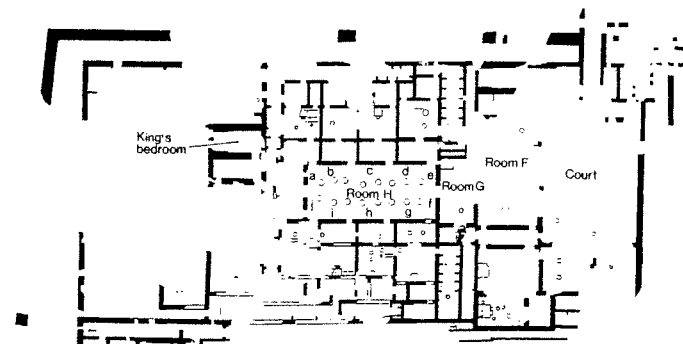
ているのが現状である。これは古代エジプト石造建築の研究に比べ、日乾燥瓦造建築についての研究が著しく立ち遅れていたことにも起因しており、石造建築についての研究から徐々に視野が広げられて、むしろ当時においては圧倒的多数を占めていたはずの古代エジプトの日乾燥瓦造建築に欧米研究者の目が向けられ始めている今日、当マルカタ王宮建築を観察し、考察を加えることには重要な意義があると思われる。

筆者は1985年から1988年にかけて行われた早稲田大学古代エジプト建築調査隊に参加する機会を得て、当マルカタ王宮から出土した夥しい量の彩画泥片の分析研究を主に担当した。本稿ではこの発掘調査で得られた資料をもとにして、当王宮の「Room H」と呼ばれる部屋⁸⁾の天井に描かれていた建築装飾画のうち、特に従来、具体的には報告されることなかった聖刻文字について考察を行うこととする。

2. 聖刻文字の出土状況

いっても過言ではなく、アマルナ王宮とはほぼ同時期に発見された経緯を有しながらも、マルカタ王宮に関しては遺構についての第一次資料そのものが乏しいために、なされて然るべきこのふたつの王宮建築の比較研究を行うにも非常に困難が伴っ

「王の宮殿」のほぼ中央を占める「Room H」からは、幾何学文様片⁹⁾、禿鷲の姿であらわされるネクベト女神像片¹⁰⁾などのほかにも、数多くの聖刻文字片が出土した (Fig. 3~7)。こうした彩画泥片は壁面近くの床面から発見されているが、発



掘調査に際しては彩画片の出土位置によって「Room H」を10ヶ所に区分し、記録を行った (Fig. 2)。S(W)地点からは大きな彩画片が折り重なるようにして出土したが、ここからは植物を束ねて作られたマット状の地下材 (以下、「マット」と略) も同時に見つかった (Fig. 3o)。一定以上の厚みを有する彩画片の裏側にはいずれも特徴的な圧痕が見られ (Figs. 3e, k)、これは泥モルタルによる仕上げ塗りを支持するための地下材の痕と思われる。出土したマットは寸法・形状ともに多くの彩画片の裏側に残るこの圧痕とよく符合し、タイトゥスが仮報告書の中で触れている天井支持材についての記述¹³⁾とも一致するため、出土したマットは天井地下材であって、上述した圧痕を有する彩画片はかつては天井の一部を構成していたと考えられる。彩画片の裏面にはほかに日乾煉瓦の圧痕を残すものも見られるので、こうした特徴を手がかりとし、天井を構成していた彩画片と壁面を構成していた彩画片とを明確に峻別することができた。

この部屋の、西側の壁のほぼ中央部分であるW(M)地点からは、ほとんど彩画片が出土しなかった。またこのW(M)地点と反対側に位置するE(M)地点からは何も出土せず、結果として「Room H」の彩画片は、この部屋の四隅に集中して埋められていたことになる。このほか、S(E)地点からもほとんど彩画片が出土しなかった。

3. 聖刻文字片の種別

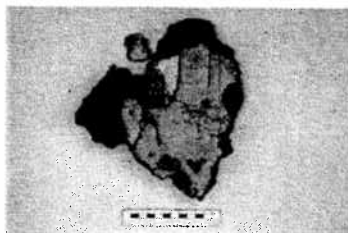
出土した彩画片は前述したように、裏側の圧痕の有無によって壁面を構成していたものと天井を構成していたものとに分けられる。ただし出土した彩画片の裏面にはほとんどの場合、天井地下材の圧痕が認められたので、彩画片全体の量から比較すればかつて壁面を構成していたものよりも天井にあったと考えられるものの方が多く遺存していることが了解された。

のうち、聖刻文字を縦に記した例が数片うかがわれた (Fig. 3p; Fig. 7, D1-6) が、天井材の痕を残すものと比べて文字の大きさはかなり小さく、描法も横書きのものとなっている。またこれらの文字片は、神殿や墓の壁面によく見られるように行を区切る縦線の間に記されることが多く (Fig. 7 D1, 3, 4-6)、縦書きの聖刻文字に関しては以上の観点から天井に記されていたものではなくて壁面に書かれたものであると判断される。

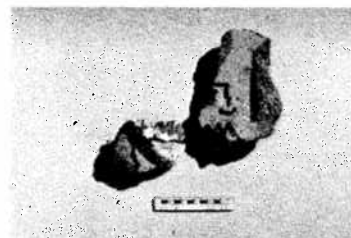
聖刻文字片はカルトゥーシェ内に記される場合を除いてすべて黄色地の上に描かれ、文字の下には赤線による下書き線がいくつかの画片で見られた (Fig. 6a C10, 6b C18, C24, 7 D1 など)。またこの各々の文字の下書き線とは別に、文字列を揃えて書くために引かれたと思われる補助線が、聖刻文字の上端と下端に接して水平に引かれているのうかがうことができた。この補助線の色彩によって、文字片はさらに2種類に分けられる。ひとつは赤線による補助線が引かれた文字片であり (Figs. 4a A1, A5; 4c A10; 4d A11; 5a B4, B8; 5b B11, B15)、他方は白で補助線が引かれている文字片である (Fig. 6a C1, C5, C10, C11; また Fig. 6b C16)。後者はS(W)地点とW(S)地点からのみ出土しており、また文字に関しても、赤で補助線が引かれているものと異なっていた。

一方、王名を記したカルトゥーシェ片も多く出土したが、これらについてはカルトゥーシェ内の文字によって上下エジプト王名の一部であるものと、サッラー名断片であるものとに区別される。一定の大きさ以上を有する聖刻文字片では、左から右読みのものか、あるいは右から左読みのものかについて判別が可能であった。

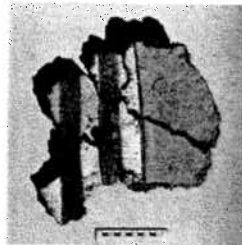
また文字の断片と同時にネクベト像の一部、あるいは黄色地に近い側より白一青一白一赤一白と続く色帯の一部と思われる文様が、聖刻文字と連続して描かれている彩画片も見られ、これらは文字、ネクベト像、色帯とが「Room H」の天井画において互いにどのような位置関係を有していた



a: Fragment of "ntr nfr"-sign (Fig. 4a, A1)



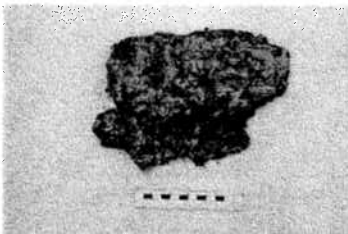
b: Fragment of Prenomen cartouche (Fig. 4a, A2, A3)



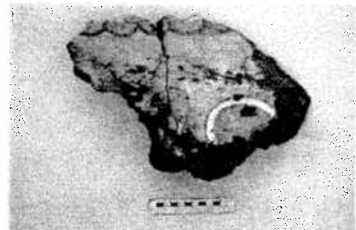
c: Part of "nh"-sign with Border (Fig. 4b, A7)



d: Fragment of "s3" and a part of cartouche (Fig. 5a, B2)

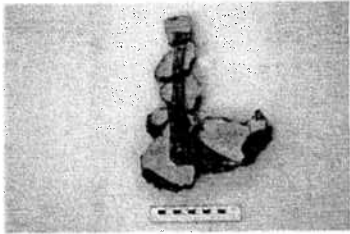


e: Reverse side of the fragment in Fig. 3d



f: Part of "s3 R"-sign and the red wing of Goddess Nekhbet (Fig. 5b, B11)

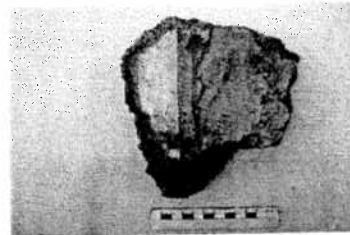




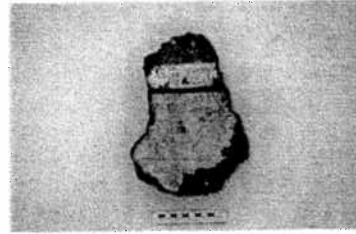
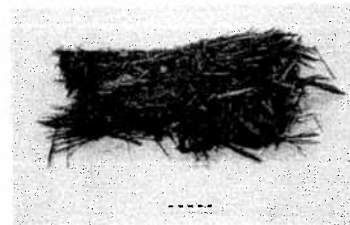
i: Assembled fragments of "b"-sign with inscription painted in brown (Fig. 6a, c1)



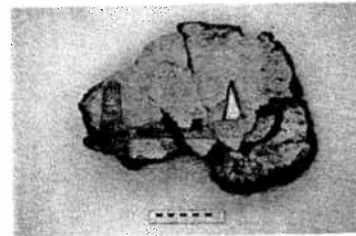
k: Reverse side of the fragment in Fig. 3j



m: Part of "s" -and "w3s"-sign (Fig. 6a, C8)



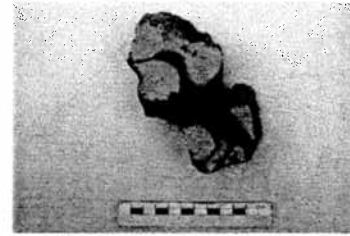
j: Fragment of "nb"-sign and Border (Fig. 6a, C4)



l: Fragments described "di", "nb" (Fig. 6a, C5)

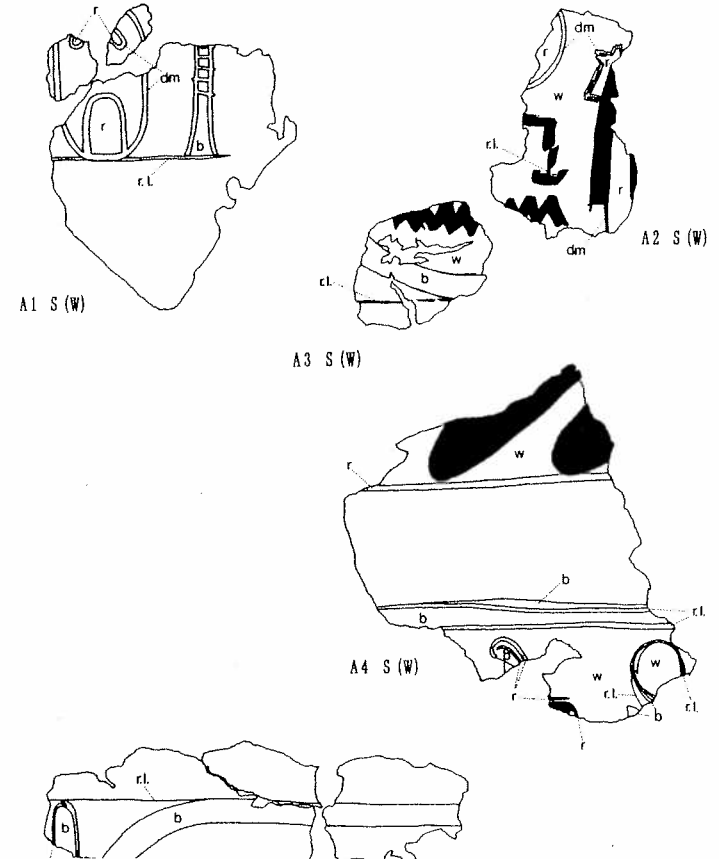


n: Part of "pt"-sign with inscription painted in brown (Fig. 6a, C11)



q: Part of wall inscription, "p3"-sign (Fig. 7, D2)

Fig. 3 (continued)



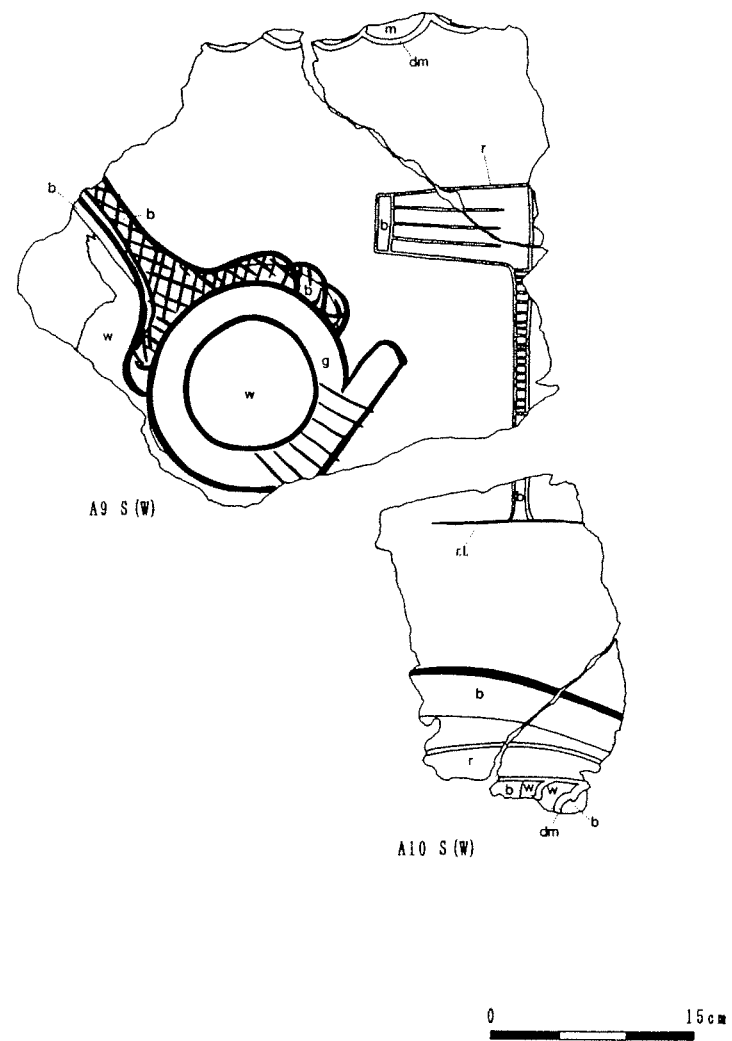
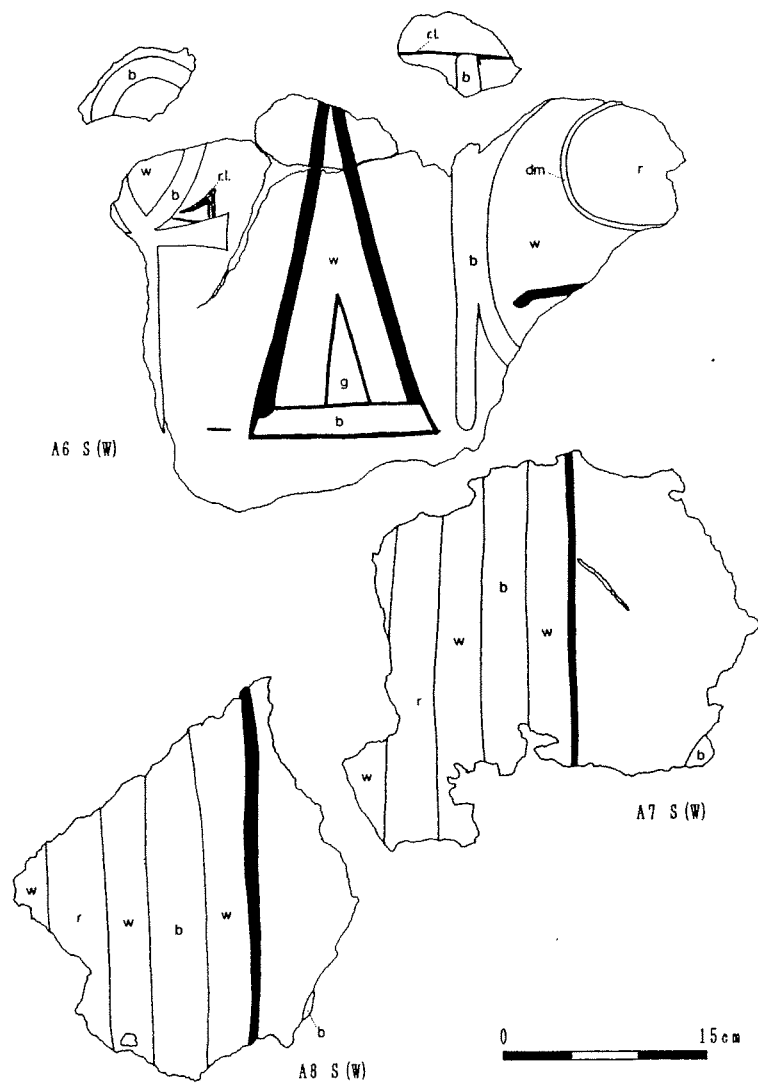


Fig. 4c: Hieroglyphic fragments read from left to right

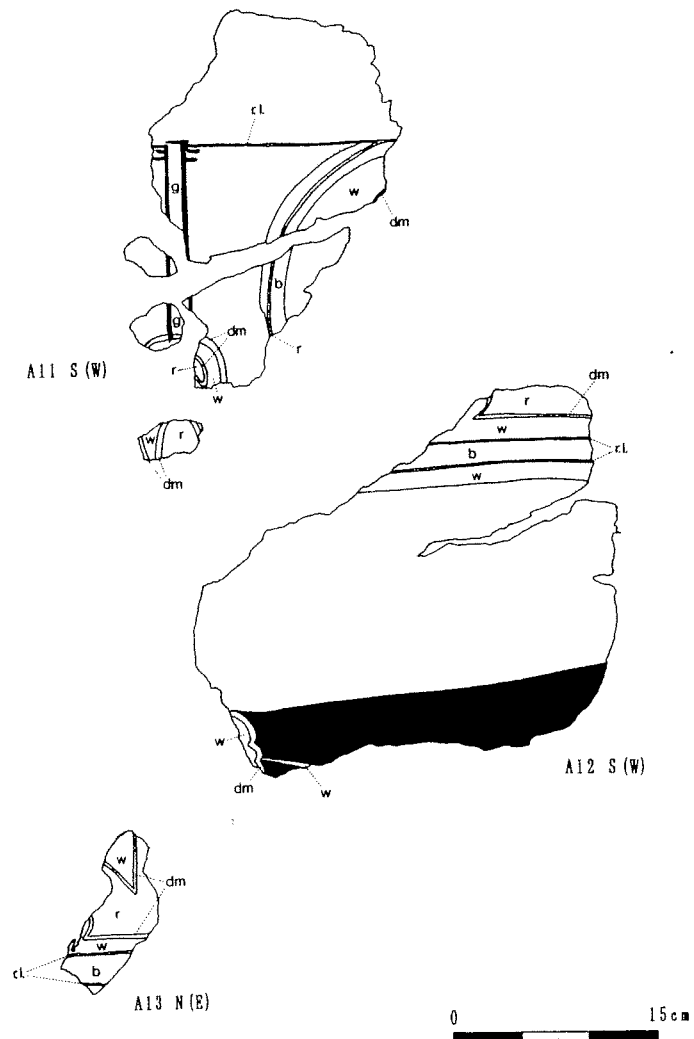


Fig. 4d: Hieroglyphic fragments read from left to right

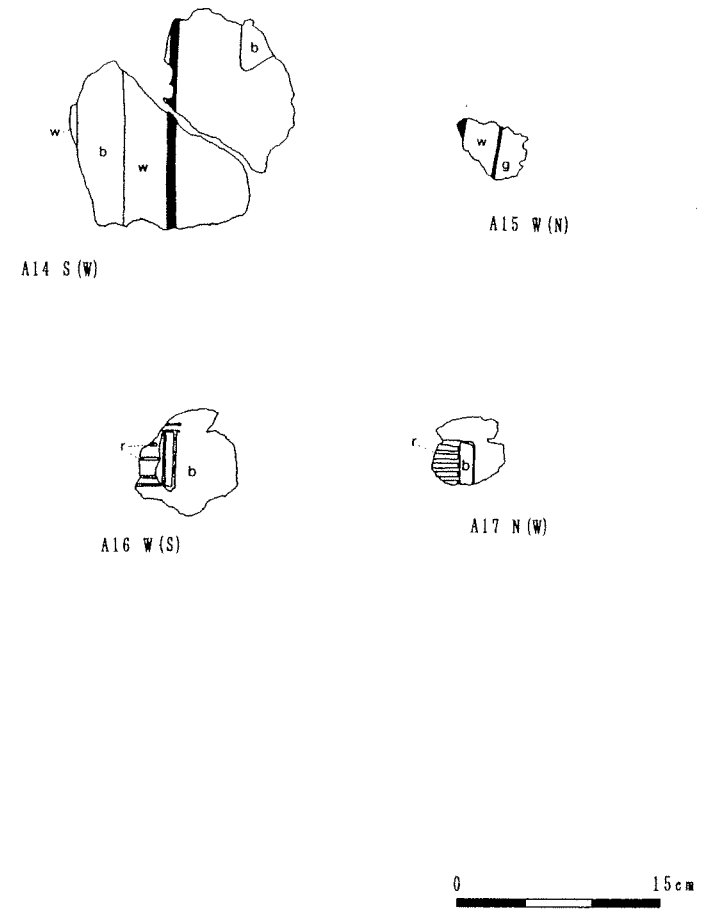


Fig. 4e: Fragments of hieroglyphic inscriptions, orientation unidentified

Figs. 4a-e Fragments of lines of inscription including Prenomen cartouche found from Room H
 Solid black represents black; plain areas transparent yellow on white ground unless otherwise labelled. The color labels are: r=red; b=blue; g=green; w=white; m=maroon; dm=dark maroon; r.l.=red line (presumably line of preliminary sketch);

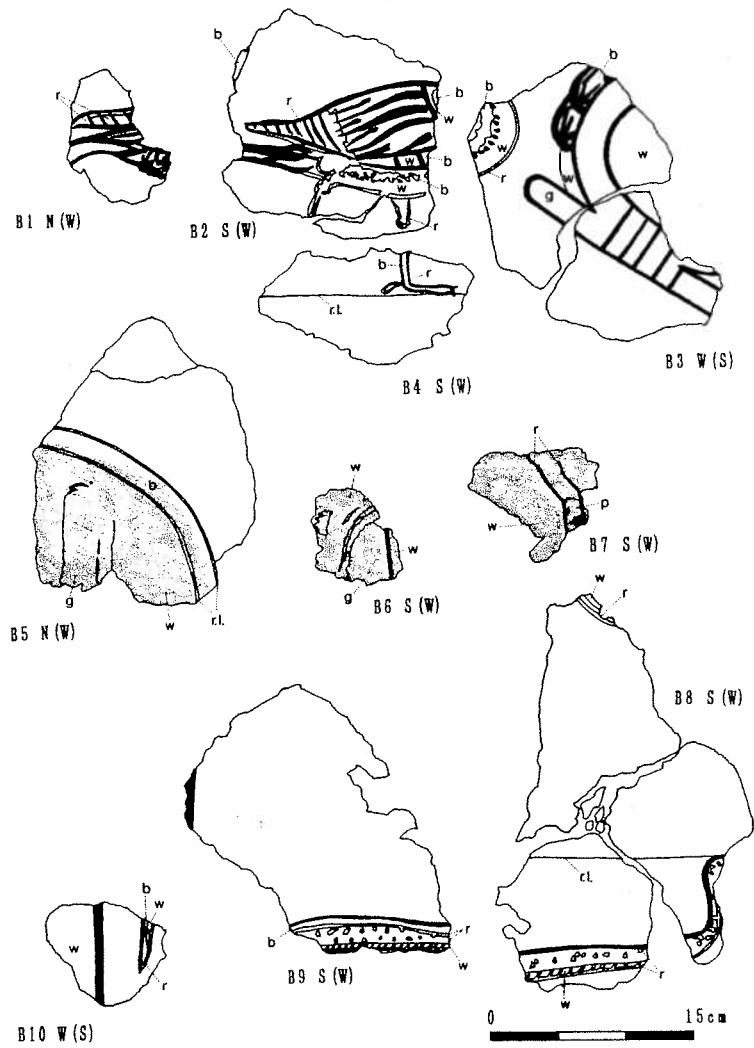


Fig. 5a: Hieroglyphic fragments read from right to left

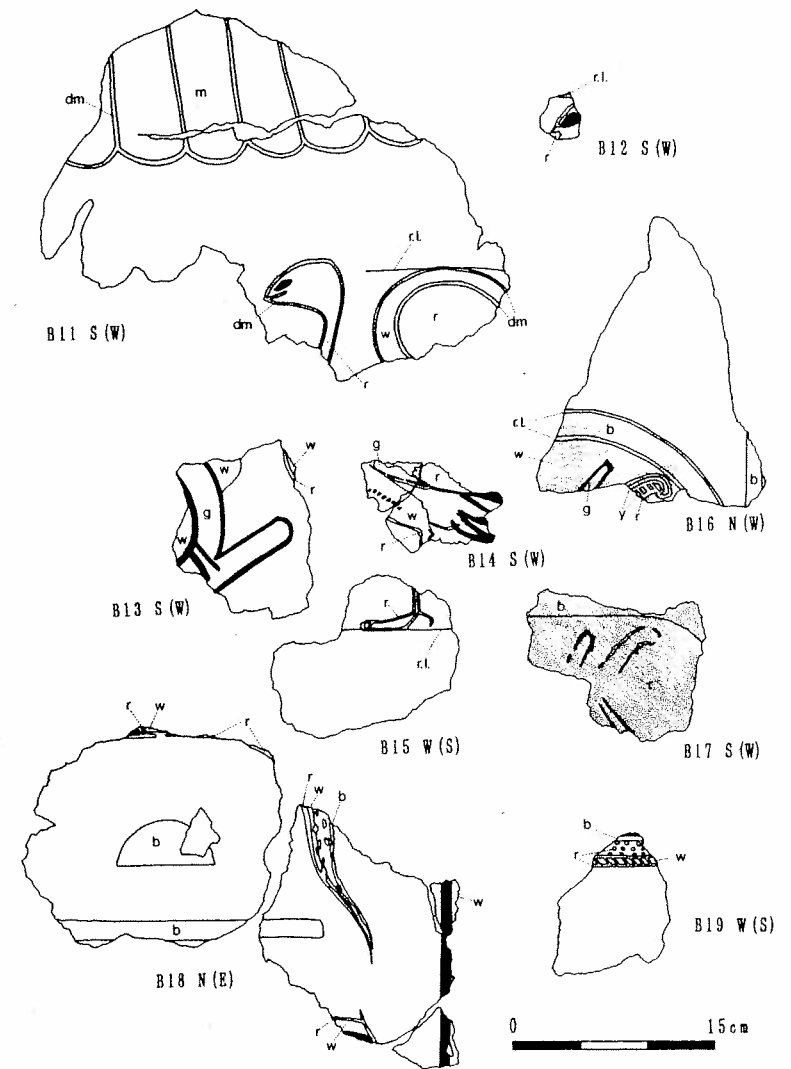


Fig. 5b: Hieroglyphic fragments read from left to right

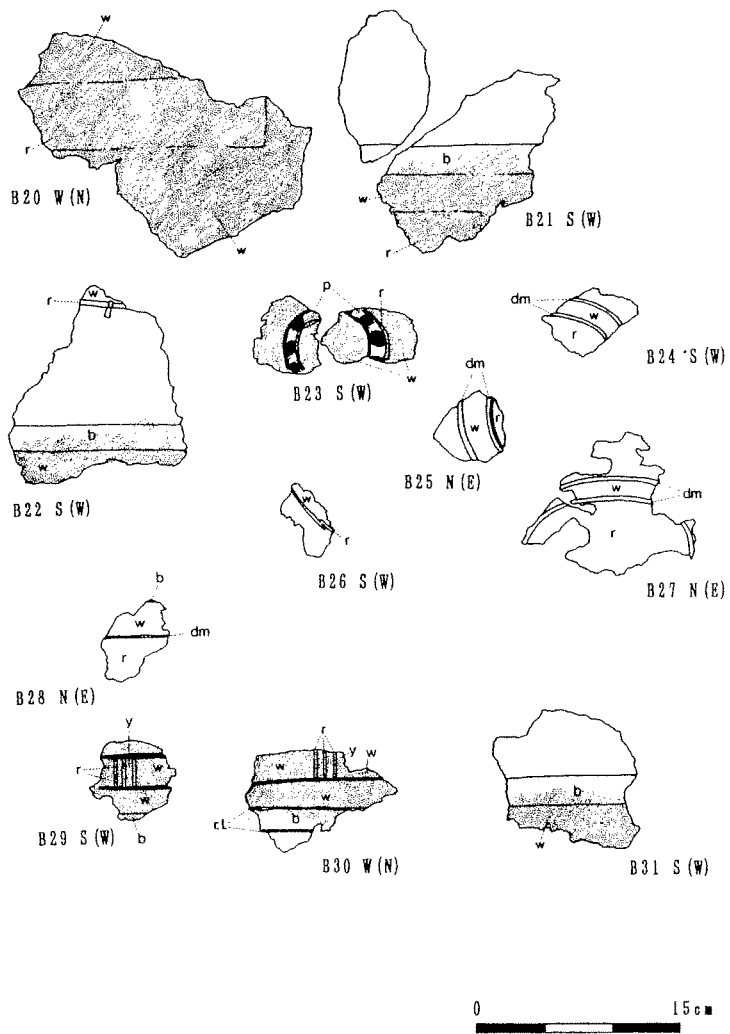
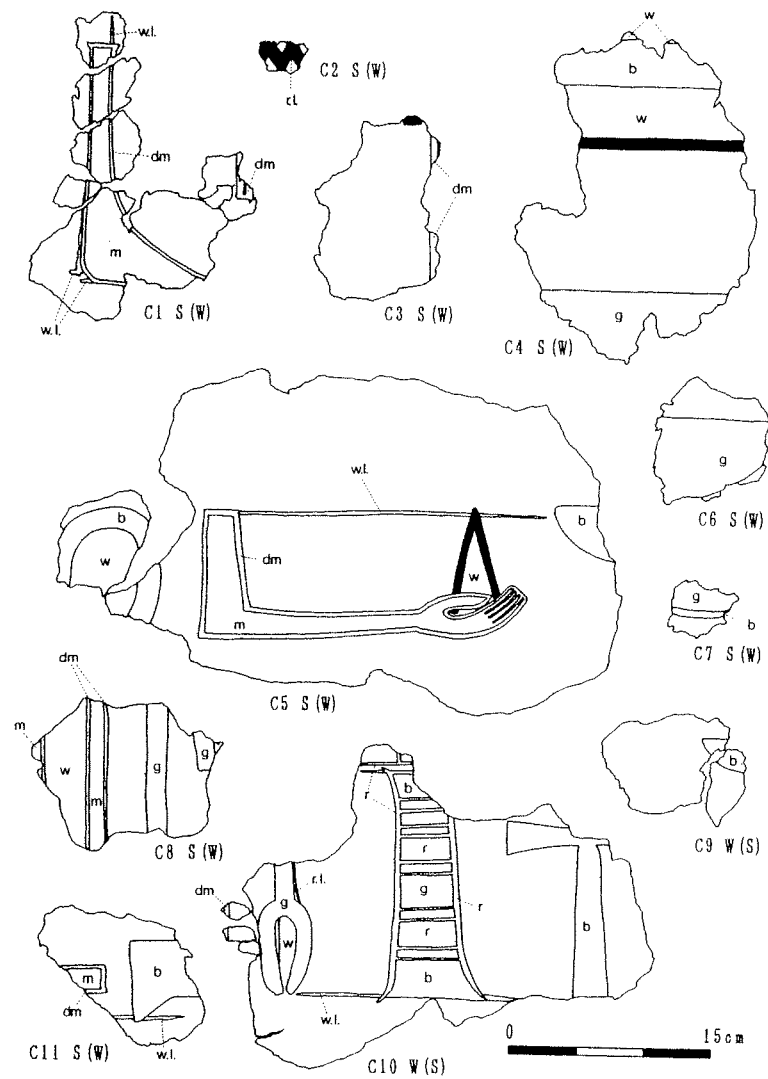


Fig. 5c: Fragments of hieroglyphic inscriptions, orientation unidentified



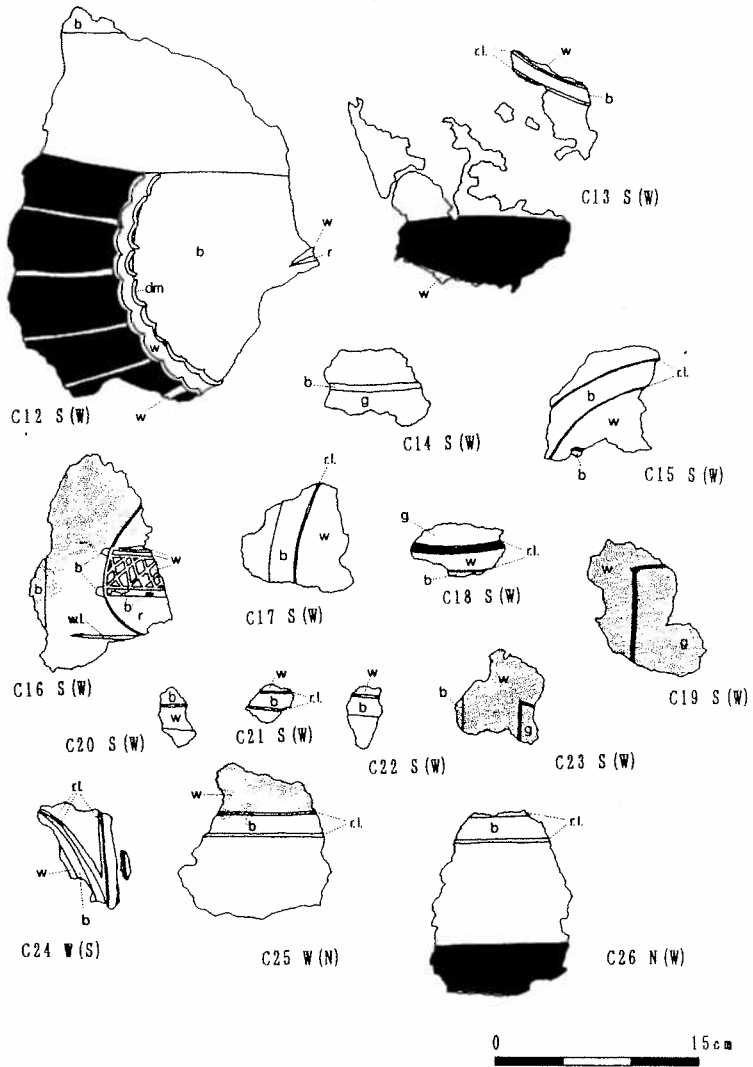


Fig. 6b. Other fragments on ceiling

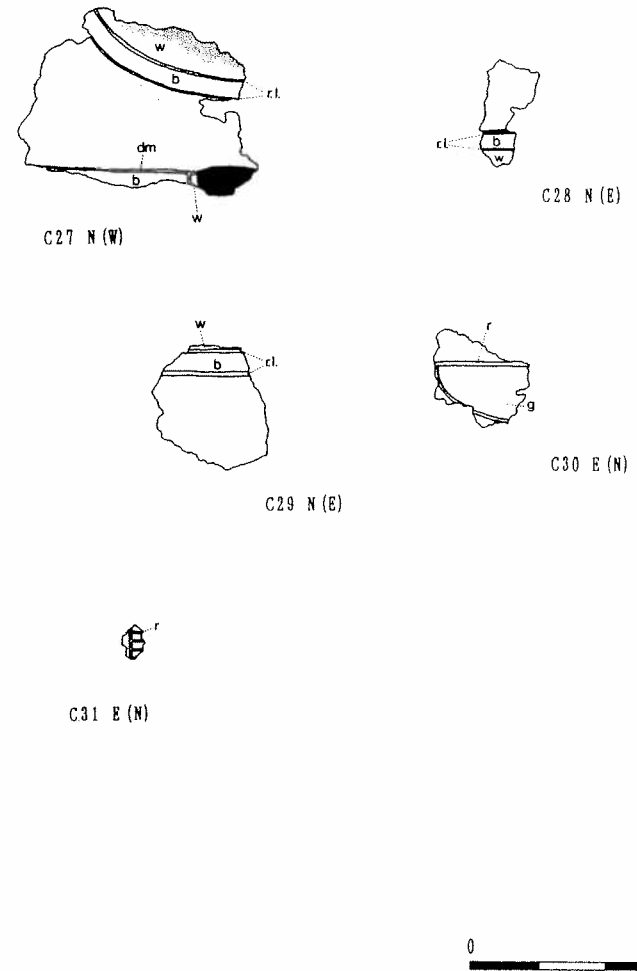


Fig. 6c. Other fragments on ceiling

Figs. 6a-c. Other fragments of hieroglyphic inscriptions on ceiling found from Room H

Solid black represents black; plain areas are transparent yellow on white ground unless otherwise labelled. The color labels are: r=red; b=blue; g=green; w=white; m=maroon; dm=dark maroon; v=yellow; r.l.=red line

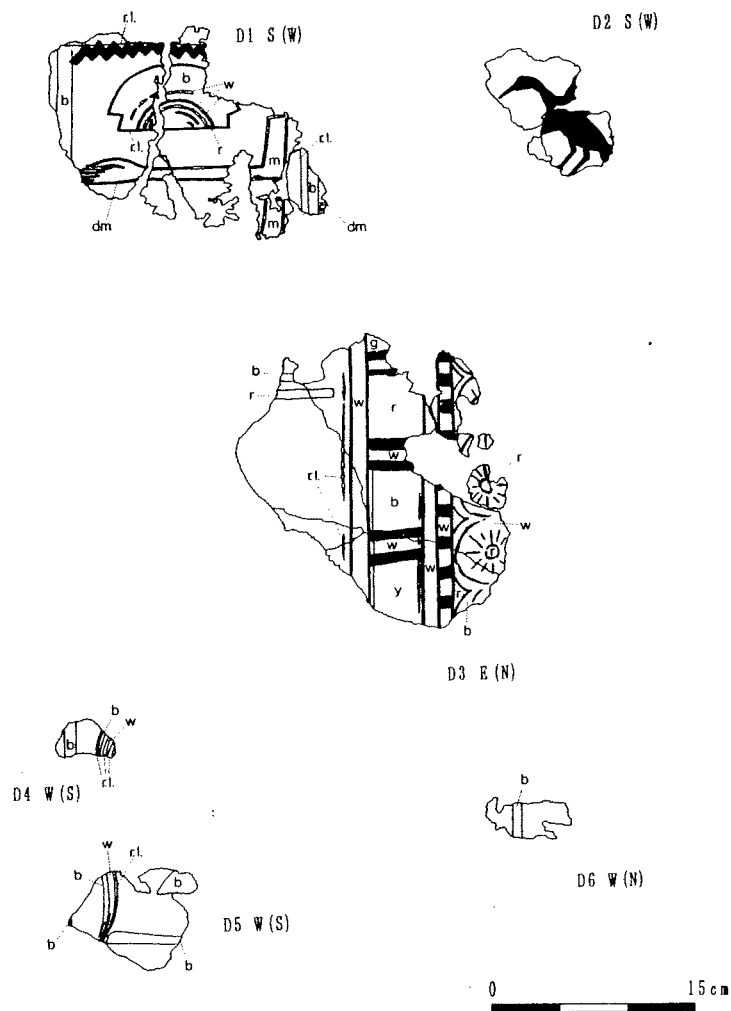



Fig. 7 Fragments of hieroglyphic inscriptions on wall found from Room H

Figs. 4a-eは上下エジプト王名を含む文字列の断片、また Figs. 5a-cはサッ・ラー名を含む文字列の断片だけを分類し、図示したものである。Figs. 4a-b, Fig. 5a では各々の文字片のうち、右から左に読むものを、Figs. 4c-d, Fig. 5b では左から右に読むものを集めている。Fig. 4e, また Fig. 5c に図示した文字片は、それぞれの文字のうちで右から左に読むものか、左から右に読むものかがはっきり判別できないものを集めた。Figs. 6a-cは上記の文字列に含まれない文字片であって、同時に上下エジプト王名の断片か、サッ・ラー名の断片かの識別が困難な文字片に関してもここで一括して扱っている。

Fig. 4のA1は文字“ntr nfr”の一部であり、A2-A5は上下エジプト王名の断片である。A6は上下エジプト王名を記したカルトゥーシュの後半部分と、それに続く修飾語を示し、A7とA8ではその修飾語の最後の文字“nh”の一部と色帯がうかがわれる。A9とA10は文字列の最初の文字“ntr”とその上下に位置するネクト像の相互の位置関係を示す彩画片であり、またA11では上下エジプト王名のカルトゥーシュの前の“nfr”、及びカルトゥーシュ内の“R”を示す。A12はカルトゥーシュとその下部に位置するネクト像の黒翼の一部をあらわし、A13はカルトゥーシュ内の“m3t”を示す。A14は“nh”の一部と色帯、A15は文字“di”の一部、A16とA17はともに“ntr”の一部である。

Fig. 5のB1, B2, B3, B4は文字“s3”の断片であり、特にB3ではネクト像の足の一部も見られる。B5, B6, B7はそれぞれサッ・ラー名のカルトゥーシュ内の文字を示し、ヘイスが述べているように¹²⁾、いずれも消された跡が見られた。B8, B9, B10はカルトゥーシュの後ろに続く修飾語“dt”の断片であり、またB11ではサッ・ラー名を記すカルトゥーシュの前に書かれた文字“s3 R”と、その上部のネクト像の赤い翼が見られる。B12は“s3 R”の目の部分であり、

トゥーシュ内に描かれていた文字の一部であり、B24, B25は文字“R”の一部と見られる。B26は文字“s3”の一部であり、またB27とB28はともに文字“R”の断片であると思われる。B29とB30はカルトゥーシュ内の文字“htp”の一部であると考えられる。B31もまた消されたカルトゥーシュの一部であることから、サッ・ラー名を含んだ文字列にかつては属していた断片であるとみなされよう。

Fig. 6のC1は右から左に読む文字“b”をあらわし、C2は文字“n”、C3では茶色と黒に塗られた文字の一部分がうかがわれる。C4は“nb”の一部であり、C5ではC1と同じく右から左に読む文字“nb”、“di”、“nh”などの文字が見られる。C6とC7は文字“nb”の一部分、またC8では茶色と緑で描かれた文字が見られた。C9は文字の形状と色彩から文字“t”の一部と思われる。C10では“nh ddt w3s”、C11においては“pt”と茶色の文字がうかがわれる。C12とC13はカルトゥーシュの一部とネクト像の翼の断片をあらわしており、C14では緑色の文字が見られた。これは文字“nb”の一部である可能性が高いが、断定はできない。C15はカルトゥーシュの断片であり、消されていないことから上下エジプト名と一応は考えられる。しかしながらカルトゥーシュ内に見られる文字片の色彩が、上下エジプト王名で見られる文字のどれにも該当しないため、この画片を上下エジプト王名の文字片の範疇に含めることをしなかった。C16は文字“mi”の一部分であり、またこの文字の左側には消されたカルトゥーシュの一部がうかがわれた。白い補助線が文字の下端に接するように水平に引かれているのが注目される。C17はカルトゥーシュの一部であり、C18では緑色の文字が見られた。この文字はカルトゥーシュ内に描かれ、上下エジプト王名の一部分か、又はサッ・ラー名を記す際に描かれる文字“”のどちらかであると思われるが、判断はできなかった。C19とC23も同様にカルトゥー

表層にそれぞれ若干の汚れが見受けられるものの、これが故意に消された痕跡か、あるいは土中に長年埋もれていたために被った損傷の跡であるかの判定はできなかった。C26, C27, C28, C29もカルトゥーシュの一部分であり、特にC26とC27ではネクト像の黒い翼部分もうかがわれたが、同様の理由によって上下エジプト王名のものか、サッラー名に属するものかの判断は保留せざるを得なかった。C30は文字“nb”の一部であるが、黄色の地の上に描かれているため、上下エジプト王名のカルトゥーシュ内に記される“nb”とは異なるものである(カルトゥーシュ内の文字は白色の地の上に記される)。C31は色彩や文字の形状から“ntr”の一部と考えられるが、きわめて小さい画片であるために、判定はできなかった。

Fig. 7に挙げた文字片は前述したように、描かれ方などからいずれも壁面に記されたものと推定される。D1とD4, D5, D6においては、聖刻文字を縦に記す場合に引かれる、行間を区切るための青い縦線が見られた。D2の文字“p3”については他の文字が縦に続いていたか、横方向であったかは不明である。D3の青と赤で彩色されている文字についても詳細は同じく不明であるが、色彩から見る限り、しばしば装飾語として用いられている言葉“m3s-hrw”()である可能性が高いと言えよう。ただしこの推定が正しいとするならば、この壁面に描かれた文字は右から左に記されていなければならない。D4とD5の文字はその色彩と形状から、文字“dt”の一部であると見られる。

4. 「Room H」天井画に記された聖刻文字の復原考察

聖刻文字に関してはカルトゥーシュの上部や下部にネクト像の一部が見られる点から、連続したネクト像の間に描かれていたことが分かり、また同一部位を描いた文字片が複数出土している

代わりに“ntr nfr”()、「良き神」の文字がいずれの場合でも見られ、また王名を記すカルトゥーシュの後には“di nb”()、「生命を与えられた者」が描き加えられていた(Fig. 8b)。カルトゥーシュの中のアメンヘテプ三世の王名をあらわす“Nb-m3s t-Rc”()の後には修飾語“stp-n-Rc”()、「ラー神に選ばれし者」が記されていたことも出土した文字片から了解される(Fig. 3b; Fig. 4a A2, A3)が、すべての上下エジプト王名に同じ装飾語があったかどうかは確認できない。

サッラー名に関しては、その前に“s3 Rc”()、「ラー神の息子」、またカルトゥーシュの後には“dt”()、「永遠に」、あるいは“mi Rc”()、「ラー神のように」が描かれていたことが彩画片の分析より知られる(Fig. 8c)。前述したように、サッラー名を記したカルトゥーシュ片は白色顔料で消されていた。

一方S(W)地点からは上下エジプト王名やサッラー名とは別に“n”(Fig. 6a C2), “b”(Fig. 3i, Fig. 6a C1), “nb”(Fig. 3i, Fig. 6a C4), “pt”(Fig. 3n, Fig. 6a C11), “di”(Fig. 3l, Fig. 6a C5)などが、またW(S)地点からは“nh ddt w3s”(Fig. 6a C10)の文字が出土し、同時にこれらの多くには上端あるいは下端に、補助線と思われる水平に引かれた白線が認められた。上下エジプト王名やサッラー名を含んだ文字列でも同様の補助線がうかがわれたが、その場合は赤線で記されている。こうした補助線の色の違いのほか、上記のS(W)地点から出土した文字片は上下エジプト王名やサッラー名の場合では記されることがないなど、これら文字片の特異な点が注目される。

S(W)地点より出土の、「Room H」における上下エジプト王名やサッラー名の場合では記されていない“nb”(カルトゥーシュ内に記される場合を除く。Fig. 3j, またFig. 6a C4を参照)をあらわしている断片には白一青一白と続く色帯が

のが自然であり、文字列の最後に白一青一白一赤一白…と続く色帯が縦方向に描かれていたことを示す彩画片(Fig. 4b A7, A8)のほかに、同じ色帯に対して直交した方向の裏痕を残すこのような画片が出土している点は、この色帯が文字列に対し、水平方向にも描かれていたことを示唆していると考えられる。

当「Room H」のネクト像が連続して描かれていたこと、また文字“nb”の上下関係からこの文字の上に色帯が引かれていたことは明らかであり、上記の点からこの色帯は、並列したネクト像のうち、最上位に位置していたネクトの上に水平方向に描かれたものであり、またこの色帯と最上位に位置するネクトの間には文字“nb”を含む文字列が存在していたことが考察される。

ネクトが並列する例では、最上位のネクトの上に書かれる一行がネクト間に記されるものと異なる場合が少なくない。その場合には一般に、ネクトの称号が書かれるのが通例である。S(W)地点やW(S)地点から発見された文字についても「Room H」のほかの場所から出土した文字との相違や補助線の色の違いから、これらは最上位のネクトの上に位置していた文字であったと想定される。S(W)地点とW(S)地点は隣接していることから、このふたつの場所から出土した文字片については接合が可能であって、本来は最上位に位置するネクトの上に書かれていた文字列であったとみなされる。

W(S)地点から出土した“nh ddt w3s”(「生命、安定、権力」と記される文字の連なりの最後には、文字に対して垂直に引かれた茶色の線が見られ、この後にも文字があったことを示している。S(W)地点やW(S)地点から出土したほかの文字から考えて、この“nh ddt w3s”の後には“snb”()、「健康」という文字が存在し、前述の画片に残されていた茶色の縦線は、この“snb”の“s”()の一部であると判断される。文字“b”の後にはこの文字列の最後尾を記

て終わっていると考えられる。

一方、同時代の遺構に見られる同種の慣用句との比較からは、この前に「与える」という言葉があったはずであると類推され、またS(W)地点からはこれに相当する文字“di”(Fig. 3l, Fig. 6a C5)が見つかったのでこのふたつの文字は、本来はつながっていたと考えられる。両者が共に右から左読みである点や、ふたつともほかの地点から出土した文字とは異なって白い補助線を有している点、“di”が記されている彩画片にはその文字の後に“nh”(「生命」)の断片が見られる点などがこのことを傍証すると思われる。

ただしこの文字列はネクト女神に対する称号であると想定されることから、「与える」という意味をもつ言葉はエル・カブのアメンヘテプ三世小神殿¹³⁾などでも見られるように、正しくは接尾代名詞の三人称女性単数形()もしくは()、「di.s」で示されなければならない。

S(W)地点から出土している“pt”()、「天空」の文字片(Fig. 3n, Fig. 6a C11)そのものについては左から読むべきものが右から読むべきものなのか判別できないが、この“pt”の左に隣接している茶色で描かれた文字断片が、仮に“s”()であるとするならば、この“pt”は“di”の右下方に位置していた文字であって、“pt”の左に接する文字“s”は“di.s”()の下の部分であったと想定することができる。この推察が正しければ文字“pt”の上にはネクト像に隣接してよく記される“nbt”()、「女主人」、転じて「女神」が書かれていたと考察することができ、文字片“di”の右には実際に“nb”の部分が見られた。前述したようにS(W)地点から“nb”の一部が出土しており、この“nb”の断片は“di”の右に記された文字片“nb”と接合できるように思われる。

現時点では、文字に関しては以上の点が明らかにされるに過ぎないが、今までの考察からは、最上位のネクトの上に書かれていた文字のうち、

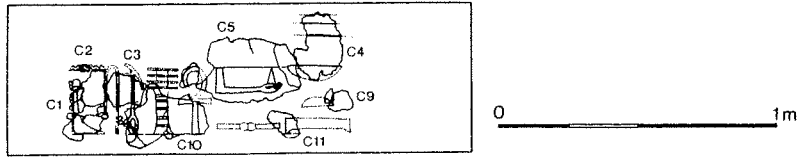


Fig. 8a Reconstruction drawing of the first line of inscription above the goddess Nekhbet on the ceiling of Room H

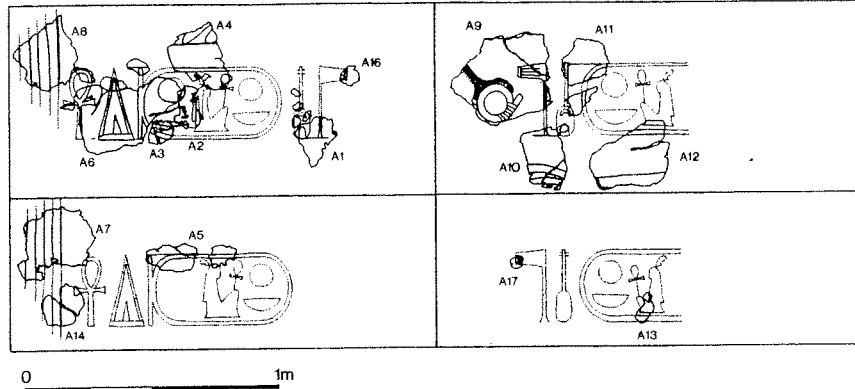
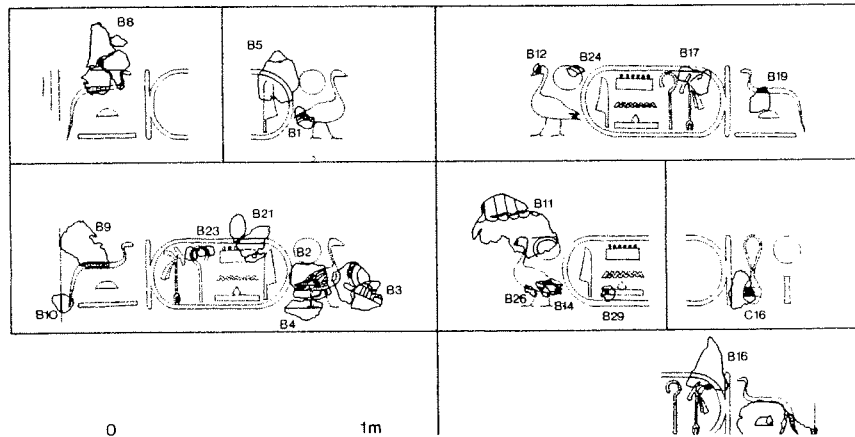
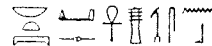


Fig. 8b Reconstruction drawing of the inscription including Prenomen cartouche between goddess Nekhbet on the ceiling of Room H



は、 (…nbt pt di.s 'nh ddt w3s snb), 「天空の女神、彼女が生命・安定・権力・健康を与えんことを」であった可能性が高いと考えられる (Fig. 8a)。

以上、考察を行ってきた点をまとめれば、1: 上下エジプト王名とサッ・ラー名のカルトゥーシュを含む文字列は、出土した彩画片から知られるようにネクト像の間に描かれていたこと、2: これらには文字列を揃えるための赤い補助線が引かれていたこと、3: 上記以外に最上位に位置するネクト像の上には、上下エジプト王名やサッ・ラー名のカルトゥーシュを含む文字列とは内容の異なる文字列が存在し、4: またその文字列は、S(W) 地点、あるいは W(S) 地点に近い場所の天井にあったこと、5: その文字列には白い補助線が引かれていたこと、6: その後半部分の内容は「…天空の女神、彼女が生命・安定・権力・健康を与えんことを」であったこと、などの点が明らかにされた。

5. 結 語

Room H から出土した多くの聖刻文字片の描かれ方や裏面にうかがわれる状態から、まず壁面の断片と天井画片とが類別され、さらに後者については文字列の内容に着目して分析を行い、Room H の天井画のうち、描かれた文字に関しては実際に出土した彩画片に基づいて文字列の内容別に3種類の復原図が作成されるなど、得られた成果は少なくない。

ネクト像とともに記される聖刻文字は通常、資料的に重要な内容を持たないため、これらについては従来、深く研究がなされていなかったと言ってもよいが、建築学的視点からは、連続するネクト像のうち最上位に位置すると思われるものの上に記された文字が S(W) 地点と W(S) 地点から

集中して出土している事実より、この部屋の内奥部に向けて空間的な序列性が高められていたことをうかがい知ることができ、当王宮に関する建築学的研究を進める上で貴重な一資料が提供できたと考えられる。

なお本研究は、文部省科学研究費海外学術研究 (昭和60~62年度交付, 研究代表者・早稲田大学理工学部教授渡辺保忠, 課題: 「エジプト・マルカタ南・魚の丘建築の復原調査研究, マルカタ王宮址との建築学的・美術考古学的比較研究」) の交付を受けた調査の成果に基づき、行われた点を付記する。

参 考 文 献

- 1) Edwards, I. E. S. et al. ed., "The Cambridge Ancient History", Cambridge (1973), Vol. II (part 1), p. 819.
- 2) Darresy, M. J., Annales du Service des Antiquités de l'Égypte, Tome 4 (1903), pp. 165-170.
- 3) Tytus, Robb de Peyster, "A Preliminary Report on the Re-excavation of the Palace of Amenhotep III", New York (1903).
- 4) Winlock, H. E., Bulletin of the Metropolitan Museum of Art, Vol. 7 (No. 10, 1912), pp. 184-190.
- 5) Leahy, M. A., "The Inscriptions", Warminster (1978).
- 6) Hope, C., "Jar Sealing and Amphorae", Warminster (1978).
- 7) Hayes, W. C., Journal of Near Eastern Studies Vol. 10 (1951), pp. 35-40, 82-104, 156-183, 231-242.
- 8) Porter, B. and Moss, R. L. B., "Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs, and Paintings", Vol. 1 (part 2), London (1964), pl. XVIII.
- 9) 渡辺保忠・他3名: 日本建築学会大会学術講演梗概集 (1986), pp. 901-902.
- 10) 渡辺保忠・他2名: 日本建築学会大会学術講演梗概集 (1986), pp. 905-906.
- 11) Tytus, op. cit., p. 13.
- 12) Hayes, op. cit., p. 236.
- 13) Tylor, J. J., "Wall Drawings and Monuments of El Kab; The Temples of Amenhotep III", London (1898), pl. 7.